

N45a α Sgr の等級変動について

藤原 智子 (SYRTE Observatoire de Paris / 京産大理)、三好 蕃 (京産大理)

有史以来、多くの天文学者が惑星のみならず恒星の記録を書物に残してきた。我々はそれらの記録の中から、恒星の等級の記録のあるものを探し、記載されている各星の年代毎の等級変化を調べて、数百年から数千年の時間スケールで変光する星を見つけ出す試みを続けている。現在用いている資料は以下の8つの文献である。

1. 「Almagest」 (137年) L.Claudius Ptolemaeus(Toomer 訳)
2. 「Šuwar al-Kawākib」 (986年) Al-Šūfi
3. 「Ulugh Beg's Catalogue of stars」 (1437年) Ulugh Beg(Knobel 編)
4. 「Astronomiae in Stauratae Progymnasmata」 (1572年) Tycho Brahe
5. 「Uranometria」 (1603年) Joannes Bayer
6. 「Histria Coelestis Britannica」 (1725年) John Flamsteed
7. 「Uranometria Nova」 (1843年) Wilhelm August Argelander
8. 「Sky Catalogue 2000.0」

前々回の発表までは、上記の資料のうち1,2,7,8のみを使っていたが、データ数が少なかったため、最大等級変化は3等未満であった。資料を増やしたところデータ数もかなり増え、その結果 α Sgrの等級が、ここ2000年で約2等から約6等まで大きく変動している事が分かった。同じく上記の文献に記述のある、 α Sgrの周辺の恒星の等級変動を見ても殆ど変化していない為、これは観測地の違いによる変化ではない事が分かる。今回の発表では、 α Sgrの特性と、超長周期変光の可能性を議論する。